

生徒に興味をもたせ学習に向かわせる，効果的な指導の在り方

－高校現場での実践を通して－

M14EP001

上杉 尚子

1. はじめに － 問題提起 －

2008（平成 21）年 3 月告示の『高等学校学習指導要領』の総則のはじめで、今まで行われてきた、いわば「知識の注入」といった形の教育活動ではなく、生徒が主体的に学ぶ態度を養うように努めなければならない、と謳われた。それにも関わらず、2014（平成 26）年 12 月に中央教育審議会から出された答申（以下、中教審答申と略記）での指摘のとおり、現状の高等学校教育は、大学入試を気にするあまり、いまだに知識の暗記・再生に偏りがちで、思考力・判断力・表現力や、主体性を持って多様な人と協働する態度など、真の「学力」育成・評価するに至っていない。

確かに、現場での実態は、「学ぶ意欲の欠如」というよりも、すでにあきらめてしまったかのような態度で 50 分間を、まさに「耐えている」生徒の姿がある。これまでの授業に対して「聞いているだけの授業が多かった。」や、「せいぜい黒板に何かを書かされたりするだけ。」といった、受け身的なイメージを語る生徒も多い。筆者自身の授業を考えても、「わかりやすい授業」を意識してはいるものの、いわゆる「講義形式」の、「一方通行」的な授業が中心になっている。このような授業のスタイルを改善したい。生徒たちが「学ぶ楽しさ」を味わえるような授業をつくりたい。との思いが、本研究のきっかけである。

筆者には以前から、小・中学校では、思考力・判断力・表現力等の能力や学習意欲を育むための具体的な取組がなされているというイメージが強くあった。そこで、2 年間の研究期間を見据えた上で、昨年度は小・中学校の現場に足を踏み入れ、研究を行った。高校

ではまだ十分とは言えない、「特別支援教育」的視点を取り入れながら、児童生徒の興味・関心を引き出し、学ぶ意欲を駆り立てるための「授業づくり」がなされている。『復習ノート』や『自主学习ノート』など、子どもの学力向上や学習意欲喚起のための『授業外』での働きかけについても、諸方策が実践されている。目にするもの・ことすべてが新鮮であった。小・中学校での様々な実践を目の当たりにし、そして実際に体験させていただいたことで、大変多くのものを得ることができた。そして、課題も見つかった。

そこで、小・中学校で行われていることを、高校現場に取り入れてみたらいかなものか。1 年目の研究で得た知見が、高校現場で通用するものなのかどうか。という、新たな疑問を抱くようになった。

2. 研究の目的

昨年度の研究から生まれた新たな疑問と課題を解決すべく、今年度は高校現場に戻って実践を進める中で、昨年度得た知見を取り入れてみる。そして、生徒たちの興味・関心を引き出し、学ぶ意欲を駆り立てるための、有効な方策を探ることを目的として、主に「授業づくり」に関する研究を行うこととした。

3. 研究の方法

(1)実習校

山梨県立 A 高等学校 第 2 学年（2 年次）

(2)実習期間

平成 27 年 4 月中旬～12 月中旬

(3)授業実践

「現代文 B」, 「古典 B」, 「国語総合」

(4)その他

生徒のノート、定期試験時・別紙アンケートなどによる感想記述の見取り など

4. 研究の成果と考察

研究の目的に掲げた、「生徒の学ぶ意欲を駆り立てる授業」のポイントは、まずは「わかる」授業だと考える。小貫(2014)は、「授業に参加するだけでなく、理解できるように」するために、授業を「ユニバーサルデザイン(以下、UD と略記)化」することを提唱している。そこで、昨年度の小・中学校実習において、柱となる視点の一つに据えた。桂(2011)や前出の小貫(2014)は、授業のUD化を目指す指導の工夫として、次の3つの要件をふまえて授業をデザインすると言っている。その3点とは、

- * 授業を焦点化(シンプルに)する
- * 授業を視覚化(ビジュアルに)する
- * 授業で共有化(シェア)する

である。小・中学校では、当たり前のようにこの3観点を常に意識し、授業が展開されている。今年度、この視点を高校での授業に取り入れ実践し、生徒たちの授業に対する意識の変容を見取る等の研究を行った。

(1)授業の「焦点化」のポイントとその成果

現行の小・中学校における『学習指導要領』・総則の中に、「各教科等の指導に当たっては、児童・生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるように」との記載があり、現場では積極的に実践されている。高等学校『学習指導要領』・総則にも同様の記載がなされている。生徒たちに入る情報、知識を「焦点化」させるために、高校現場にも導入してみてもどうか。授業を進める中で、以下のポイントを重点的に意識した。

- *1 時間ごとの「授業のねらい」を、黒板に明示する。
- * 「書く」時は書く、「聞く」時は聞く等メリハリをつけ、今すべき作業の時間を明確化する。

リハリをつけ、今すべき作業の時間を明確化する。

- * 授業の最後に「今日の授業で一番大事だと思うところ」を、ノートに記入させる。

「授業のねらい」を明示することは、授業の“流れ”をつくるために有効だったようで、生徒たちからは、「今日の授業で何を考えればいいのかははっきりわかって、良かった。」、「今日の授業のポイントが初めにわかると、どういう点に注意して読めばいいかわかる。」などといった声が聞かれた。生徒たちにとって、「“考える”ためのポイントがわかる」ということにつながるようで、見通しをもって“考え”ながら授業に臨むためのきっかけとなっている。作業時間にメリハリをつけることも、「書く時は書く、聞く時は聞いて“考える”ことができる。」と感じているようだ。また、「振り返り」をすることについても、「自分の中で学んだことが整理できるし、さらに理解を深められると思う。」、「自分で考えて答えるというのがあると、その後の記憶が違う。」、「次の時間へのつながりがスムーズになる。」等の感想が挙がっている。授業の「振り返り」とともに、その時間内での、自分自身の思考の「振り返り」になっているようだ。生徒たちがポイントを探しながら、集中して授業に臨むことが必要だと、自ら気づくようになっており、今までよりも積極的に“考え”ようとする姿勢が現れている。

「授業のねらい」を明示する。という、ほんの少しの工夫をするだけでも、生徒たちにとってその授業の「わかりやすさ」が増す。そして最後に「今日の授業で一番大事だと思うところ」をノートに記入して終わるとなると、授業中最後まで気が抜けず、集中度が増す、ということにもつながると考えられる。

(2)授業の「視覚化」のポイントとその成果

授業を「視覚化」することについては、本研究を進める前から筆者が取り組んでいたことだ。小貫(2014)は、「視覚化は考えることを

支援するための工夫」と述べている。そこで次の点にポイントを置き、生徒たちの思考の「視覚化」を図ることで、「わかる」、「考える」授業をつくろうと考えた。

＊板書の仕方、ノートを取り方をパターン化する。

＊チョークの色の使い方や、文字だけでなく、フリップや写真なども使い、より視覚に訴える工夫をする。

＊板書と手元を“一緒”にするための、ワークシートの活用・構成について考える。

特に、「板書」に関しては、筆者が力を入れたところである。ダラダラと書き連ねるのではなく、ポイントを整理し、構造化しながら作品の「読み」の過程を視覚化するように心がけた。また、なるべく「1時間の授業で、板書は黒板1枚に収める。」ことを心がけた。この試みに対しての生徒の反応は、実践をはじめて間もない段階からうかがえた。



図1：読みの「構造化」を意識した、板書例

図1のように、上手く1枚に収まると、生徒たちのノートのちょうど1ページ分で収まるようで、授業中に、「すご〜い。ぴったり(1ページで)終わるよ。」「うお〜。見やすい〜。」といった声が漏れ聞こえてきた。あらためて聞いた感想をまとめてみた(図2)。科目・授業内容によっては、もちろん「1時間1枚」の原則が、どうしても無理な場合もあるが、1時間の授業内容・伝えるべき情報内容を、黒板1枚に収めることは可能だとわかった。生徒たちにとっても、黒板に書かれたものを書き写すには、適度な分量となったようだ。途中で飽きてしまったり、写すのをあきらめ

てしまったりする生徒がいなかった。ワークシートについては、さらに生徒たちの「書く」作業量・時間の軽減につながり、「ポイントがより整理されているので、特にテスト勉強の時にあると便利。」と、好意的な声が挙がっている。

- 後で見直し、(特に)テスト勉強をしようと思ったときに、その授業で何をやったかがわかりやすいし、流れがわかる。
- ポイントをきちんと色で強調してくれてあるから、わかりやすい。
- 絵なんかも使ってるから、わかりやすい。

図2：「構造化」を意識した板書に関する生徒の感想

(3)「共有化」の視点+“生徒の顔があがる”授業づくりにおける成果

昨年度の小・中学校実習において、筆者にとって画期的だったのは、授業が“双方向”だったことだ。問いかけに対する子どもたちの反応に、教師がすかさず反応する。考えを尊重し、子どもたちのちょっとした“つぶやき”のような声までも拾い上げる。そして、一人一人の“考え”を皆で共有しながら授業が展開されていく様子が、とても印象的であった。このような授業を、高校でも展開できないか考えた。また、平成26(2014)年11月に発表された、文部科学大臣からの諮問の中に、これからの社会を生き抜くために必要な力を子どもたちに育むためには、「アクティブ・ラーニング」や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があるとし、「こうした学習・指導方法は、知識・技能を定着させる上でも、また、子供たちの学習意欲を高める上でも効果的であることが、これまでの実践の成果から指摘されています。」とある。

このことから、生徒の“考え”を活かして展開する授業をつくるために、授業のUD化に加え、“アクティブラーニング(以下、ALと略記)”の考え方を参考にした要素を、

授業に取り入れてみようと考えた。授業のUD化に関して、筆者が一番の課題としていた、「共有化」についての打開策になるかもしれない。そのような考えからも、一つの試みとして“AL”の考え方を取り入れた授業実践を進めた。

授業の導入としては、まず「リレーリーディング（「。」読み）」を行った。「小学校で実践していることだから、『子ども扱いして』と、生徒に怒られるか。」と思うところもあったが、途端に生徒たちの顔つきが変わり、教室内の緊張感が明らかに高まった。生徒たちの“頭”を動かすために、適度なウォーミングアップを図り、展開部で次の二つの活動を取り入れてみた。

①付箋活動

小・中学校の授業と高校の授業とで、圧倒的に違うのは、「生徒の発言の有無」だ。高校生も反応はしてくれる。しかし、自ら進んで（挙手して）発言しようなどという生徒は、皆無に等しい。何とかして、生徒たちの“考え”を引き出す方法はないか。生徒たちが思う“疑問”を引き出して、授業を展開できないか。生徒たちが、自ら主体的に授業に臨む策として考えたのは、「付箋の活用」だった。

まずは、「現代文B」の小説の単元で取り入れてみた。段落ごとに生徒たちが「疑問に思ったところ」、「好きだな、いいなと思う表現」を、それぞれ付箋に書き出す。書き出された疑問点や気になる表現に沿って、作品の『読み』を進めていく。という授業を展開した（図3）。そして図4は、生徒たちの感想である。「人前で自分の意見を言う」ことに対する苦手意識の軽減を含め、付箋を使うことによって、生徒たちが、自分の意見を表出しやすくなっている様子がうかがえる。回数を重ねるごとに、積極的に意見を述べようとする姿勢も見られ、授業に「参加している」感覚が強くなったようだ。



図3：生徒の意見を使った授業のまとめ

- ・ みんな自分の意見を言わないので良いと思うし、自分の意見が素直に書ける。
- ・ みんなの前で“言う”必要がない。
- ・ 板書だけだとボーっとしたりする時間が生まれてくるので、付箋はあり。
- ・ 眠くならない。楽しい。
- ・ 自分たちの意見(声)を聞いてもらっている感じがする。
 - ・ 授業に参加している感じがする。

図4：付箋活動への生徒の感想

次に、詩の単元では、初読の感想をノートに記入した後、「疑問に思ったこと」と「気づいたこと」をそれぞれ付箋に書き出してもらった。生徒たちから具体的に出された「疑問」や「不思議」、そして「気づき」を使って『読み』を深めた。筆者は、生徒たちが気づけなかった表現技法に関することや、作者の背景などを補足するだけで、生徒たちからの「声」

で、十分に『読み』を深めることができた。最後に『読み』終えてみての感想を書いてもらった(図5)。

- ・ 初めて読んだときの感じと、授業後の感じと、当たっていたのが少うれしかった。
- ・ 言葉の使い方がやはりプロだなと思った。
- ・ まだ全部が理解できたわけではないが、意外と詩って面白いかもしれないと思うようになってきた。機会があれば詩集とか読んでみたいと思った。

- ・ 初めて読んだときは、何を表現しているのかがあまり分からなかった。
- ・ なぜ夜なのに陽が射しているのかが気になった。
- ・ 読み深めていくと、イメージを出すために使う言葉が選ばれていることが分かった。
- ・ 詩には、一つ一つの言葉に深い意味があるし、それを理解することが楽しいので、これからも「詩」を勉強してみたい。

- ・ 初めて読んだときは、不思議で何書いてあるか全然わからなかった。授業でやった後も、何となくわかったような気はするけど、やっぱりまだよくわからない。だから、作者のほかの詩も読んでみたい。

図5：「詩」の授業後の生徒の感想

これらの記述を見ると、自分の「疑問」や「気づき」を、付箋によって可視化する形で表出し、それをもとに考え、作品の『読み』につなげていることがわかる。考えながら読んだうえで、さらなる「疑問」、そして「もっと読んでみたい」という「意欲」や「興味」に発展させている。生徒たちにとっての「学び」が深められているということだろう。

付箋を活用することによって、生徒が自分の意見を出し、考えることを活発化させ、積極的に学びに取り組もうとする姿勢をつくることができたのではないかな。

②話し合い活動

付箋の活用とともに実践してみたのが、話し合い活動だ。「古典」での、筆者の今までの

授業形態を考えると、口語訳から文法事項の確認、内容の整理まで、ほぼ授業者である筆者一人が喋って終わる。というものだった。今回「古典 B」の授業では、グループで口語訳を完成させたり、作品の主題を考えさせたり、なるべく生徒たちが主体的に関わる時間をつくるように心がけた。ある授業では、作品の主題をまず自分で考え、それを出し合いグループで討議した結果、最終的に『自分の考える主題』を書き出す。という形をとった。

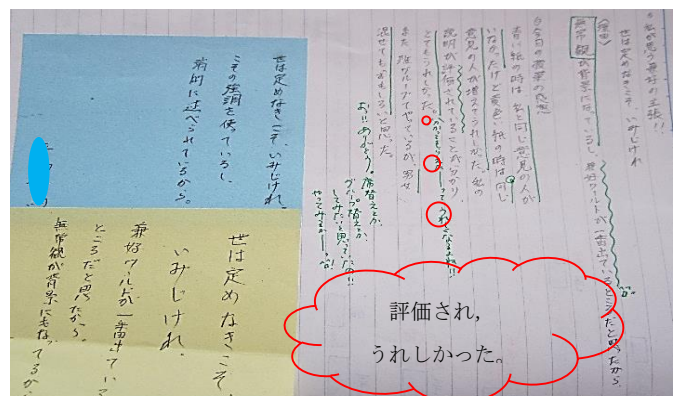


図6：話し合い前後で意見が変わらない生徒 A

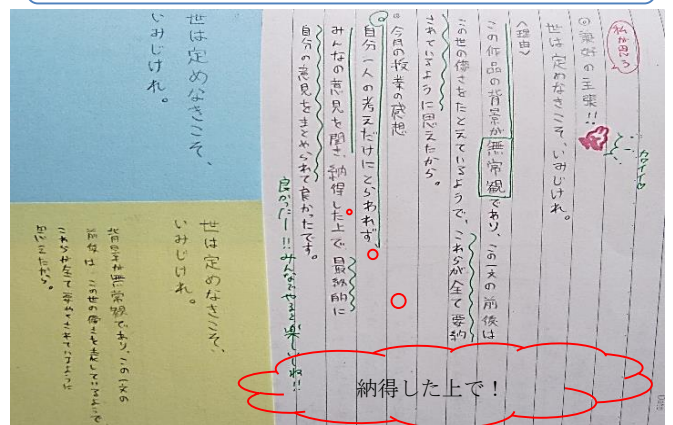


図7：話し合い前後で意見が変わらない生徒 B

図6・7は、グループで話し合う前後とも、自分の意見が変わらなかった生徒のノートだが、図6の生徒 A は、「意見を出し合ったときは、私と同じ意見の人がいなくて不安だったけど、話し合った後同じ意見の人が増えてうれしかった。私の意見が評価されていることがわかり、とてもうれしかった。」と述べ、

図7の生徒Bは、「自分一人の考えにとらわれず、みんなの意見を聞き、納得した上で最終的に自分の意見をまとめられてよかった。」と述べている。どちらも自身の考えに自信がもて、積極的に学びに向かう姿が見られる。図8は、自分が初めに出した意見を話し合いの後に変えたのだが、最終的には、「やっぱり」と記述した上で最初の意見に戻した生徒Cのノートである。自分自身に問いかけながら、よく考えながら学びを深めている様子うかがえる。これらの生徒の様子から、自分の考えを表出し、可視化し、皆と共有する。そして他者の意見に刺激を受けながら、自分の考えを確立していくことができるようになったと言えるだろう。

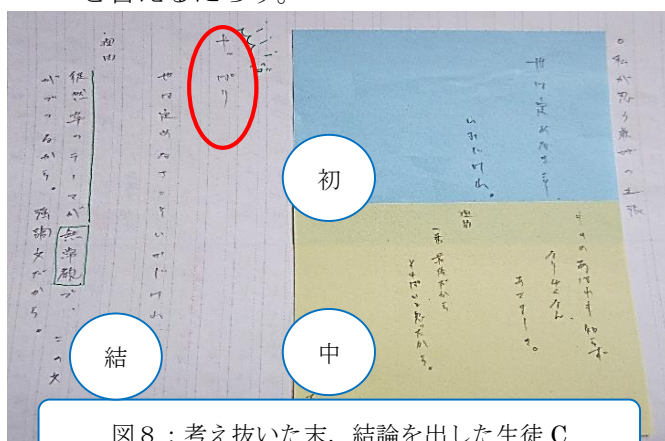


図8：考え抜いた末、結論を出した生徒C

また、ある授業では、現代を生きる自分たちが考える「理想」を話し合い、まとめた上で、作品が書かれた時代に生きる作者が考える「理想」と比べながら、作品を読み進める。という形で授業を展開した(図9・10)。「他の人の考えが見えて、楽しい。」「自分と他の人の意見を比較でき、自分の考えの幅や知識が広がる。」「ずっと前を向いて黑板を見ているより、グループになってみんな意見を出し合うのは楽しい。」など、生徒が「楽しい」と感じて学びに向かっていることがわかる。仲間との話し合い活動もまた、生徒たちの学ぶ意欲の向上に、一定の効果があると言えるようだ。

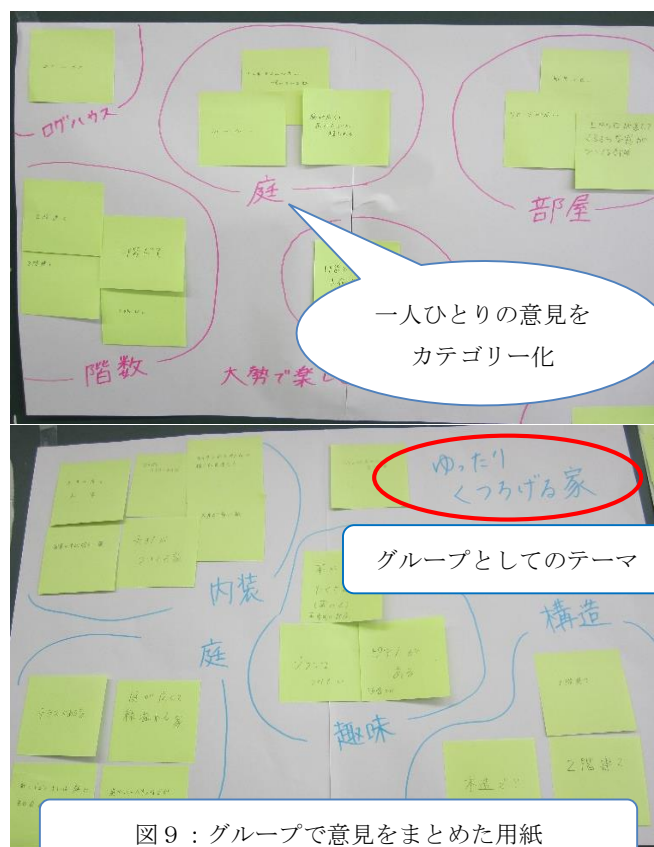


図9：グループで意見をまとめた用紙



図10：各班の意見を共有した上で、授業進行

以上、二つの活動を取り入れた授業実践に取り組んでみたわけだが、それについての生徒の感想をまとめてみた(図11)。これを見ると、生徒にとって、「自分の出番がある」、「自分たちの意見が取り入れられる→意見が言える」、「自分たちが参加している」といった意識をもてるのが、学ぼうとする意欲につながると言える。また、授業の中に「生徒が“考える”時間」をつくれれば、生徒は“考える”ようになり、『“考える”ことが楽しい』

と感じられるようにもなる。今回の取組から、明らかに生徒が主体的に学ぼうとする姿が見られるようになったと言え、評価できるところだ。また、普段アンケートに答える時などに、「～だから、〇〇だ。」と、根拠を述べて回答できる生徒が増えてきた。これも、“考える”ことを継続的に意識してきた成果だと言えるだろう。

- 今までの国語は、せいぜい黒板になにかを書かされたりするだけだったが、皆で話し合ったり、考えをまとめたりする参加型みたいなものが多くて退屈せずに済むし、眠くならずに済むので、良かった。
- 付箋を使った授業ははじめてで、最初は、みんなと意見が違ったら嫌だとか、何を書いていいかわからなくて嫌だなんて思ったときがあったけれど、やっていくうちにみんなと違っていいんだとか、自分の意見を書けて考えることができてよかった。
- みんなで考えて答えを出していく感じが良い。
- 作者や登場人物の感情を想像することができて、国語に対して“楽しい”という感情が生まれる。

図 11：“AL”的な要素を取り入れた授業の感想

5、全体考察 — 今後の課題と展望 —

(1)「焦点化」,「視覚化」を意識した授業づくりについて

「焦点化」についての今後の課題は、「“ねらい”で始まり、“大事だと思うこと”で終わる。」という授業の流れを定着させることだ。今年度の実践中は、時間配分が上手くいかず、「振り返り」のための時間が取れずに終わってしまう授業が多くあった。何より生徒たち自身が、集中して授業に臨める実感を得ているのだから、それを大切にしなければならない。大きな反省点だ。小・中学校で実施されている「全国学力・学習状況調査(2015)」についての分析においても、「学習の見通し」と「学習の振り返り」を積極的に行った学校ほど、B問題の記述式問題の平均正答率が高い

とある。今後、高校生の「学力の向上」との相関関係を視野に入れ、実践を続けたい。

「視覚化」に関しては、特に板書について、「今まで、よくも1時間に2枚も3枚も黒板書いていたものだ。」と半ば呆れ、今までいかに情報の整理ができないまま板書をしてきたか(=授業をしていたか)、ということをも反省できた。前記したとおり、もちろん、授業の内容によっては「1枚」では収まらない情報量を扱う時間もある。無理をして「1枚」に収めようとする、バランスが悪くなり、かえって生徒たちにとって、「見づらい板書」になってしまう危険性もある。実際、生徒からは、「後でノートを見直した時、わかりにくいときもある。」との声も挙がっている。「バランスと分量」を今後の課題としてさらに研究し、実践を重ねたい。ワークシートについても、「生徒が『書く』ことにかかる時間を短縮でき、その分を活動や『考える』ための時間に充てられる。しかし、捻出できた時間をいかに使うか、という大きな課題がある。「生徒にとって“見やすい”、“使いやすい”ワークシートとはどのようなものか」を、さらに意識して作成することも考えなければならない。

(2)「共有化」の視点+“生徒の顔があがる”授業づくりについて

「共有化」の視点については、課題が多く残る。生徒たちが書いたものを皆で“共有”する際の工夫について、「(付箋は)黒板に貼りだすだけだと、小さいから見にくい。」との声も、すでに挙がっている。ICT機器などの活用も視野に入れて考えなければいけないところだろう。生徒たちの、「“人前で自分の意見を言うことに対する苦手意識”をどう軽減するか」も大きな課題となる。「話すことで相手のこと(考え)がわかってくる」とか、「自分の固定観念だけではなく、様々な考えに触れられるし、知識が豊かになる。」など、他人と意見を交流させることの意義は、生徒たちも十分に理解している。しかし、どうしても

「恥ずかしい」、「人前で自分の意見を思うように言えない」という意識が強く、「仲のいい友達同士であれば話せるけれど、気を遣ってしまう」生徒の実態がある。『話し合い』をするのが、当たり前。」という意識を、生徒たちにも、そして授業者にも植えつけられるぐらいに実践を重ねることが必要だ。失敗を恐れずに、より参加しやすい『話し合い』の方法を模索していくことが必要だと考える。

「生徒の学ぶ意欲を引き出すには、まずは“わかる”授業をつくることではないか。その答えは、「板書もしやすく、授業も理解しやすくなるので、とても楽しい。『もっと知りたい』という思いも増えてきた。」と、生徒が出してくれた。生徒たちにとって“わかる”授業ができれば、授業が、学ぶことが『楽しい』と思える。『楽しい』と思えば、『もっと知りたい。学びたい。』という、意欲につながる。」との答えを得た。そして、生徒の学ぶ意欲を引き出すためには、「AL」の要素を取り入れた授業が有効的だ。」との答えも得られた。小・中学校で実践される取組が、「学ぶ」ことに消極的な生徒を抱える高校現場でも、その効力を十分に発揮することを実証できたのではないか。また、筆者自身が主たる目的として意図的に取り組んだことではないが、今回の実践は、『言語活動の充実』にもつながる取組ではなかったか、と仲間たちからの指摘もあった。研究をまとめるにあたり、思わぬ成果にも気づかされた。今後この取組を継続する際の、もう一つの視点になるだろう。

次は、「わかる」から「できる」へ——。生徒の学ぶ意欲を、「学力の向上」にどのようにつなげるか。」が重要な課題だ。“AL”の要素を取り入れた授業を成立させるには、生徒同士や教師と生徒間の「人間関係づくり」、また「ルールづくり」や「学級づくり」にも課題が出てくる。いずれにしても、小・中学校での取組が、大きなヒントになるかもしれない。引き続きそのような視点を持ちつつ、得

られた成果をさらなる成果とすることが、次なる課題だ。

6、おわりに

本研究は、筆者の現場経験における悩みがきっかけとなったものだが、奇しくも、前述の中教審答申の方向性と合致する部分がある。特に“AL”については、次期指導要領の改訂にも盛り込まれる要素だと考えられる(田村, 2015)。「生徒の“学びの質”の保障」と、「生徒」につけてもらいたい“力”は何か」について常に考え、授業をつくろうとすること。そして何よりも、生徒とともに学び、成長をし続ける「教師」であろうとすることを、今後の課題とする。

7、引用・参考文献

- ・中央教育審議会(2014)「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について(諮問)」文部科学省
- ・中央教育審議会(2014)「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育, 大学教育, 大学入学者選抜の一体的改革について — すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために — (答申)」(第177号)文部科学省
- ・林望(2011)『国語授業のユニバーサルデザイン 全員が楽しく「わかる・できる」国語授業づくり』東洋館出版社
- ・河合塾編 小林昭文・成田秀夫(2015)『今日から始めるアクティブラーニング 高校授業における導入・実践・協働の手引き』学事出版
- ・国立教育政策研究所(2015)「平成27年度全国学力・学習状況調査の結果について(概要)」
- ・小貫悟・林望(2014)『授業のユニバーサルデザイン入門』東洋館出版社
- ・文部科学省(2008)『小学校学習指導要領』、『中学校学習指導要領』、『高等学校学習指導要領』
- ・田村学(2015)『授業を磨く』東洋館出版社
- ・上杉尚子(2015)「生徒に興味をもたせ学習に向かわせる, 効果的な指導の在り方 — 小・中学校での実践を活かして —」山梨大学大学院教育学研究科教育実践創成専攻『平成26年度教育実践報告書』pp.81-88.